



8月26、27日開催 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム ジョイントワークショップ
「歴史災害と都市 京都・東京を中心に」

災害像の構築にむけて

Historical Disasters in Cities and Local Areas in Japan :
Toward a Better Grasp of the Big Picture

北原糸子氏に聞く

災害絵図を研究素材に

COEのプロジェクトには最初からずっと「災害」ということをテーマに関わられています、まず御自身の問題関心からお話していただけますでしょうか。

北原 3年前の2003年からこのCOE（「人類文化研究のための非文字資料の体系化」）が始まっていますが、「非文字」というものをどう解釈するのかについて、私の場合は自分の研究を活用できる範囲で解釈をしました。

わたしの研究領域は災害史研究です。日本の江戸時代・近世から近代のはじめぐらいまでを対象としてこれまで研究してきました。この時代の大きな災害に関しては資料が残されています。そのうち文字資料は圧倒的に多いですが、絵図の資料もかなりある。文字資料の分類はなかなか大変ですが、まず絵図で災害資料の分類をするという仕事を手掛けました。描き手は誰か、何の目的でだとか、どこに流布する目的なのかとかを。絵図だと結構わかりやすい。文字以外の資料ということでのお話があったときに、ああこれはもう災害の絵図をやろうと、自分では勝手に思っていて、対象のタイトル「非文字」に関して、自分が独自に領域を打ち立てられればいいんじゃないかと思いました。

初年度は江戸時代を対象にして、すでにそれまで一緒に仕事をしていました原信田實さん⁽¹⁾が、『名所江戸百景』は、実は江戸地震との関係があるということを主張をされて、テレビでも一緒に出てお話をしたりしたつながりがありましたので、もうちょっと深めようということで、初年度はその方に共同研究員になっていただきました。それから翌年は時代を近代のほうに延ばして、絵図やかわら版、写真などで災害が流布されていきますので、そういうメディアのいろいろな内容に関して、まだ災害の立場からの研究はありませんでしたので、たとえば版画と写真との間に介在する石版画とか銅版画などの領域で

何が言われているのかということ、増野恵子さん⁽²⁾という石版画の専門の方を共同研究員にして、一緒に研究をいたしました。

その翌年は、さらに明治の初期から十年代二十年代、まだいろんなものが固まっていない日本の近代国家の政策的な面で、どういうメディア戦略というか、そういうものを発信していたのかということについて、東京文化財研究所に当時はおられた鈴木廣之先生⁽³⁾に共同研究員になっていただいて、今は東京学芸大学の先生になっておられますけれども、以上の三人の共同研究員とともに、三年間を過ごしてきました。お三方の共同研究員が一年一年別でありますので、全体としてのまとめということで、その先生方に加わっていただいてプレシンポを計画いたしました。2005年の終わりごろということになります。

私のCOEにおける関わりとして、発表のあり方とか、共同研究の流れとしては以上のような形になります。

今話された幾種類かの資料は、その資料としての性格の違い、それぞれのアプローチの違いといった点ではいかがでしょうか。

北原 江戸時代、災害が起こりますと、それを描く描き手にはいくつかのタイプがあります。

本当に専門の絵師が描く。それは藩の伝統的な技法を学んだ人が、何かの命令で、いわば今日的に言えば行政的な命令、あるいは藩主の命令で「起きたことを正確に」という形で描く。それは正確に何が起きたかを伝えるという目的があって、藩に残しておくということもあるけれども、幕府にも届ける。届けるのは、一つは小さい藩で災害が起きますと、自力で復興できませんので、資金は江戸以外では外から流れてくる以外ほとんどありえない。したがって、領民から吸い取るという方法と、幕府から借りるということがありますね。幕府からの拝借

Compared with woodblock prints, photographs catch things more clearly as they are. However, their realism seems to assimilate our imagination into a fixed style.

金は一万両とか二万両とか、二万両がまあ最大限だと思いますけれども。十カ年賦で無利子で返すという方式が決まっておりますので、それを獲得するために、何が起きたか報告をしなければならいんですね。そういうための材料として、藩主が命令して絵師に描かせたという災害絵図などが残されております。

そういうものの他に、たとえば藩主が救済をするということがあると、村の名主たち、いわゆる村落行政の責任者に命じて被害の戸数とか、救済の対象となる実際の数値を調べさせるということがあります。何が起こったのかわからないわけですから、たとえば洪水ももちろんですけども、山が崩れたとか、噴火で土石流が起きてどの辺まで広がったかということとか、あるいは犠牲になった領民が何人いたか、家が倒壊したとか、数値で示すことのほかに、絵を添えるということが多い。そうしますと、それぞれの名主は自分の村の領域だけをやりますけれども、名主の間でどういう報告を領主に出すかを相談しあうんだろうと思います。絵が書き写されて行政担当者間で情報が飛び交うという状況があったことを示す痕跡をたどることができます。

ですから、災害を最初に受けて、純粹に自分の衝撃として自分の日記に描こうとするものもありますけれども、むしろ、量的に残っているのは村落行政など、現代流に言って行政文書の中での災害記録が多い。それから絵図に関しても、いま残されているのは、幕府に収めたとか領主に収めたというものは少なく、その控えとか、自分が子孫のために残すとか、村の人に伝えたいという目的で残すものが、もう一つあります。

それから全く違ったタイプとして、今で言えばメディア、かわら版みたいなものが、だいたい江戸の18世紀の半ばぐらいから残されるようになります。この類の資料が非常にたくさんあって、恐らく都市を中心に売り出されたと思われます。かわら版出版の業者は情報を得ただけで、自分自身は実際に災害場所に行かないで、既成の地図に崩れとか何か、火事で言えば江戸の都市の地図がありますね、それに焼けた範囲を赤くするとかという形で情報を流します。

そういう点で言えば、残されているものの中には典型的なものがある。だけれども、類型化されていく経緯もたどることができるというようなことも言えると思いますので、必ずしも一概に非常に典型的なものが多いとか、



北原 糸子 KITAHARA Itoko
神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科
非常勤講師 / 事業推進担当者

あるいは、オリジナルな自分の体験に基づいた非文字が多いとかは一概には言えないと思います。

ただ近代との比較で言えば、これはもうは圧倒的に写真の力というものが強いわけで、そういうものをいったん見た人間というのは衝撃を受ける。江戸時代で一つ私自身が不思議に思っているというか、やっぱりこうなんだなあと思っているのは、遺体というものをあまりリアルに書かない。いまも新聞で載せないということがありますがけれども、磐梯山噴火というのは明治21(1888)年に起こりましたが、その時期というのは、写真が技術的に進歩していく途中の時代で、写真そのものが地方では非常に珍しかった時代らしくて、写真を撮る人間も写真の力に驚き、見る人間もそれに驚いているという感じの写真が多いので、遺体の写真も比較的多く残されているんですね。

濃尾地震になると圧倒的に少なくなっちゃう。濃尾地震の場合にはかなり早撮り写真師と名乗る写真の有名な専門家が入っていますから、県や官庁から委託されて災害現場に入っているんですね。ですからたぶん自己規制というか、あるいは県のほうからこういうのは撮らないでほしいとか言われるのかわからないけれども、死者7,000人も出た災害としては、遺体の写真がほとんどないというのは不思議です。磐梯山噴火では500人ですからね、死者としては、まあ範囲は狭いかもしれませんが、とにかく写真師が遺体を見ていないはずはないのですが、全然それが少ないですね。

リアルさというのは、死体だけの問題ではありません。



関東大震災の発生時刻で止まった時計塔（関東大震災の写真帳から）

別の点でリアルさは写真を通して、この時期珍重されました。災害の研究者が輩出してきますから、地震学者などは実際の現場を撮るといふことにこだわりますので、リアルな地変の写真というものが多く撮られます。これらが多くの場合、焼き増しされ流布します。それが今度は象徴的なものとして何枚も焼き増しされていくわけです。必ずしも写真だからといってリアルという側面ではなく、むしろ、類型化の意味は違いますが、災害とのイメージで言えば、同じものを焼き増して「これがあの災害だ」という形で類型化していく筋道がメディアを通して形成される時代になります。だから江戸時代とは違うけれども、メディアを通して作られる災害認識というものは、そんなにイメージは豊かになるわけでもないんですね。固定化するというか。何と言っているか、対象としては広がり、手段としても広がる割には、人間の伝えようとするイメージは固定化されていくというか、何か逆説的なことが起きているような気がします。関東大震災になると遺体の写真が圧倒的に増えます。ものすごいんです。すぐに禁止されますが、今、東京都の許可を得て、慰霊堂の写真を大学のCOEとして調査させていただいていますけれども、その写真資料で遺体写真がすごく多いのは、私はたぶん、禁止されたので持っているみたいへんだというので震災記念堂に供養の意味を含めて納めたものが多いんじゃないかと思うんですね。写真の調査記録をとっている学生たちも、びっくりして、あまりこうしたものに触れていない若い人たちはちょっとへなへなとなっている感じがありますね。

当時は戒厳令下ですから、いろんな意味での強い報道

規制があって、なかなか心落ち着かない。単に遺体の写真が禁止されただけではなくて、これをもっているとどうにかなるんじゃないかとか、そういう恐怖感みたいなものがあつたのではないかと、そういう感じがしますね。多くの人があの時に殺されてもいますしね。

都市の災害痕跡を探る

さて次に8月に開くワークショップについてですけれども、これはプランを拝見しますと、古い歴史をもった都市の災害の問題が主軸のようですね。

北原 こういう形にしなくても良かったのですが、とりあえず立命館大学COEは、京都を中心に、防災を含めたいくつかのプログラムが大々的に展開している大学なんです。その共通の課題は、防災と、京都という都市について古代から現代に至るまでを対象に研究を蓄積させていくという方向のようです。

一緒にジョイントワークショップをやろうと考えましたのは、立命館大では都市の歴史災害のデジタル化したデータベースが非常に進んでいますので、それをワークショップの話題とさせていただくということですね。東京は広すぎて一つにまとまるということはなかなかないので、関東大震災の研究も、いろんな研究者がいる割にはひとつにまとまってやるということはなかなかなさそうなんですね。この横浜でやるとすると、テーマとしては関東大震災をやらなければ対応できないんじゃないの、ちょっとまずいんじゃないの、という問題が出てきましたので、関東大震災を扱います。関東大震災は神奈川県域の海岸部には大きな大きな被害をもたらしていますので、必ずしも都市災害ばかりではありません。しかし、とりあえず、京都との比較という意味で、東京に絞りました。東京よりむしろ震災の被害としては、横浜の方が大きいといわれていますが、私自身が研究が進んでいないので、大きく問題を把握できる段階にありません。このワークショップでは、研究のまとまりの悪い東京を対象として、文系も含めて、理学・工学系の人間、その他の分野も含めて、歴史災害の研究をやろうという呼びかけの目的が一つあります。完成された研究を発表するのではなくて、これからこういう方向で研究をしていくと

いろんなことがわかるのではないかということ、東京の災害史研究をやっている人に呼びかけたいというのが、私の一つの意図です。そのひとつの目標として、共同の場を設定してひとつのまとまりを持った研究を進めている立命館大COEのグループがあるのではないか、その研究の実績と方法を学ばせていただきたいというのがこのワークショップに賭けるわたしの期待です。

もちろん、これはこちらのほうの非文字のプログラムとして進めさせていただきなければいけませんので、私のほうで問題を投げかけるのは、写真のデータベースをやるということなんですけれども、それだけでは震災の研究はできませんので、すでにいろいろ研究されている東京のほうの関東大震災の研究者に声をかけ、ご協力いただきます。

あとはもう一つ、それだけでは災害の研究は完結しないわけで、現代との関わりで、どんな問題を考えている人がいるのかということを示唆したいということがありました。「都市を中心に」ということになっておりますけれども、第三部の「歴史災害と現代」というところは必ずしも都市ということではありません。さまざまな方法で災害研究へのアプローチが行われていることを議論の俎上に載せたいと考えました。神奈川大学からは、香月先生にもご参加いただいております。それは日常生活の中での災害認識ということで、第一部の京都を中心とした立命館の方々のお話と、第二部の関東大震災と社会との関係とは異なる形での研究の成果をご発表いただくという構成になっております。

歴史災害という領域はなかなか研究者が育っていないので、工学系や理学系は別にしますと、歴史学の研究者で災害研究をしているのは非常に少ない。いろんな分野の人と一緒にやらないと進まない研究だという意味でも、これをジョイントワークショップとして問題提起をしたい、ということです。

いずれにせよ、ひとつの対象をいろんな側面から見るということで、全体として捉えられる。ですから方法がごちゃ混ぜになることでもないし、従来の方法を砕けさせることでもなんでもなくて、むしろそれぞれが理解できなかったことを引き取って、より理解が深まるというのが、いろいろな分野の人と一緒にやる災害研究の面白

さだと思うんですけども、なかなか一緒にやってみないと通じないのね(笑)

ジョイントワークショップへの期待

それがワークショップの方向性であり本質である、ということになります。

北原 ええ。講演会じゃなくて、討論の時間が少し少ないですが、一般の方々にも討論に参加していただきたいと思います。最初の日に、立命館大のデジタルのいろんな先進的な方法を提示してもらおうと思いますので、技術的な話はそこで、質疑応答で解決。次の二日目の方は、人間の話が中心になりますが、それを受けて、両方をかき混ぜた討論をワークショップでやりたいと思っていますので、ワークショップとうたったのは、その辺に意図があります。単なる討論会でもないし、それから時間の割り振りで皆さんに適当に意見を言ってもらおうということでもなくて、いったいこれで、こういうデータベースとか、画像の表し方を通して、言いたいことがいえるのかとか、技術的に面白いことだけ、技術的に高度化することだけが目的になっていないのかとか、本来目的としたことが、どれだけ実現できているのかということをお聞きしたい。

神奈川大学の私の方は立命館大とは比べ物にならないほどの個人的にマイナーなスケールでやっておりますが、理念としてどういうことを考えているのかということ、先達としての立命館大学からいろいろ教えてもらいながら考えたいということを狙っております。

(注)2005年11月20日開催、第1回国際シンポジウム プレシンポジウムでの成果を踏まえて、各発表者が論点を整理、内容を深めた論文が下記報告書に収録されている。
神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告1
『版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出』

- (1)原信田實
「浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか」
- (2)増野恵子
「見える民族・見えない民族 『輿地誌略』の世界観」
- (3)鈴木廣之
「変貌する明治の図録」

(2006年5月17日 COE共同研究室、聞き手：香月洋一郎
記録：関ひかる・丸山泰明)

We can think about disasters from various points of view. They might be imperfect. However, they will be more substantial through our discussion. This is just the first step.